



九条70クはらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 27

2007(平成19)年6月6日(水)発行

<63年前の1944(昭和19)年6月6日は、ノルマンディー上陸作戦の日> 第二次世界大戦の末期、ナチスドイツを崩壊させるために連合国軍が行った対独作戦。アメリカのアイゼンハワー元帥指揮の下に、輸送船艇約4000隻、兵員約8万が、北フランスのノルマンディー海岸に上陸。空前の規模で「史上最大の作戦」、「世界で一番長い日」、またこの日は「Dデー」とよばれた。上陸も成功し戦局に一大転機をもたらし、8月パリも4年におよぶドイツ軍占領から解放された。



私の八月十五日

依々不存

異国の避難民として一九四五年八月十五日、つまり敗戦(終戦などという曖昧な表現は使わない)の日、私(と着のまゝ、それまで住んでいた土地や家を追われて異国をさまよう無数の避難民の中にいた。

父は昭和十八年に病死 母は子ども三人を抱え 満州国からの逃避行

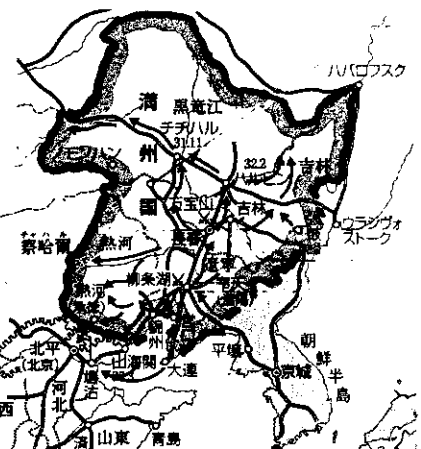
二年前に父は帰らぬ人となつていたから、十歳の兄とそれぞれ二つ違いの姉と私を引き連れての母子家庭である。敗戦の五日前まで、一家は旧満州熱河省(現在は河北省、遼寧省、内蒙、ゴル自治区に分割編入)の遼平(ランペイ)と首都の新京(現在の長春)や奉天(現在の瀋陽)のような帝国の中枢部にいたなら、もつと早い段階で偽帝国終焉の始まりを知つたであろうが、それでも蚤・しらみであらう臭いを感じするようになり、早く死の臭いを感じするようになり、八月十日には、町外れの鉄路に集結した日本人コミュニティの逃避行が始された。陽にいた私の一家は、そのころ朝



▲敗戦の一年前、昭和19年の秋。旧満州国、承德の寺に父の遺骨を納めた時に。右より32歳の母佐々木千代、兄、姉、そして5歳の私。

満州国

- ・満州国建国宣言 1932.3
- ・日滿議定書調印 1932.9
- ・満州帝国成立 1934.3



るため、約四年のあいだ暮らし難平を皆から一日遅れてトラツクで脱出した。結果としてそれが一家に幸いした。(貨物列車で逃れた人たちは悲惨な目に遭つたらしいから。)

敗戦の記憶は、**コウリヤン畑の青い空**ともあれ、決定的な敗戦の事実を知つたのは、日本人のとりあえずの集結地の一つ、錦州にたどりつく前、おそらく朝陽の叔父の家にとどまるときではなかったか。そのときの記憶はほとんど消えたがコウリヤン畑の上空

に飛来したソ連の戦闘機を見上げた時の、気の遠くなるようなどきどきでも続く青空のことはぼんやり覚えていて。引き上げ時の苦勞はあるにはあつたが、そこにいたるまでの地獄のような逃避行も(沖繩戦と同じく、皇軍が臣民を裏切り見捨てた事実を決して忘れてはならない)、大多数の日本人が味わつたような空襲の恐怖も知らぬまま戦後の日本を生きてきた。だからであろうか、建国以来初めての大規模な海外移住とそこからエクソダス(旧約聖書時代のユダヤ民族のエジプト脱出に匹敵する)という日本民族の稀有な体験の意味も重大性も特に考えずにこの歳になつてしまった。(裏紙面に続く)

「満州国」の実態

—13年5か月余の傀儡国家



▲「五族協和」をうたった建国ポスター(左)と山海關に建てられた王道樂土大満州国の碑(右) 建国の理念として「五族(日本・満州・漢・朝鮮・モンゴル)協和」と「王道樂土」が掲げられたが、見せかけにすぎなかった。



▲「満州国」執政愛新覺羅溥儀(溥儀)辛亥革命によって1912年に退位した清朝最後の皇帝、宣統帝。1934(昭和9)年、帝政の実施とともに皇帝に即位して康徳帝と称した。

▼首都新京(長春)に建てられた行政の中樞、國務院



(表の紙面より)
若く病死した父の無念さ
「日本人は悔い改め出直せ」
しかし二年前、父の追悼文集を作る過程で、三十三歳若さで病死した父の無念さに初めて気がついた。満州帝国の下级官吏として無辜の民から土地を取り上げ強制的に集落を作らせる政策(ゲリラ戦を恐れて)に荷担させられた父、早くから五族協和と王道樂土の欺瞞に気づき苦しんだ父。母の記憶によると、父は生前、省公署の役人たちの会合で、「日本人はすべて悔い改めて出直すべきだ」と悲憤慷慨の言葉を繰り返したそうだ。

すべての戦争は狂気の愚かさの極みです
愚かながら、日本はいまだに悔い改めていないどころか、一部に、いやや中枢部にまたぞろキナ臭い動きが始まっている。だから自分のこれまでが無慮、無反省を悔じ入りつつも、次代を背負う若者たちに可能な限り伝えていきたい。どのような理由をつけようとも、すべての戦争は狂気であり人間性の全否定である。戦争の「できる」普通の国を目指すなど、美しいどころか愚かさの極み、没義道(もぎどう)そのものである、と。
(はらまち九条の会会員 元・東京純心女子大学教授 橋本町に在住)

事務局より

○年会費納入は郵便払込みでもできます

本九条の会の「年会費1000円」は、

- ① 直接事務局員に納入するか、
- ② 郵便払い込みで納入する。青色の用紙で手数料は本人負担の「払込取扱票」を7月に、会員の皆様に郵送いたします。
・2007年会費は、現在、会員の約2割の方が納入済みです。これからの方は11月末日までをお願いいたします。

○やはりそのままの大きさがいいのかなあ?

1971年原町市が市制25周年記念で発行した『憲法』の小冊子ですが、復刻版を作り配布しようと、目下、「はらまち」小高「鹿島」の九条の会で、話が盛り上がってきています。大きさも、そのままがいいのか、ちょっと拡大して発行するのがいいのか? 復刻版なら、やはりそのままの大きさか? 全国でも例のない試みかなと、なんかワクワクします。

憲法

1971
原町市

○ありがとうございます

今日6月6日、はらまち九条の会様宛で、事務局の山崎宅に匿名のご芳志が郵送されてきました。現金に「わづかばかりですがこれからの活動にお役立てください。はらまち九条の会様 無名生」というお手紙も添えられていました。ちょうど6日は事務局の打ち合わせの日で、一同感激し、心より感謝申し上げます。

ところが、同様のご芳志は小高の九条の会事務局中里範忠様宛にも届いておりました。共々、この紙面をもちまして、心より御礼を申し上げます。ご芳志は勿論、会の活動資金として大切に有意義に遣わせていただきます。本当にありがとうございました。

元々が暗中模索、試行錯誤の事務局運営で、会の発足以来一年半、何をやっても、どんな行事を開催しても、ニュースを編集発行するたびに厳しい批判や苦情ばかりで老齢のせいもあり疲れておりましたが、この励ましは本当に涙が出るほど嬉しく思います。(山崎)

○「美しい国(うつくしいくに)」は後ろからは「惜しい苦痛」だそうです。成る程、納得!